

全久院報

松本市深志 3-7-50 電話 0263-36-3211

宗務所の庶務主事に就任しました

今年も早や半年が過ぎようとしています。私も54才になり、様々な分野で中堅どころとなりました。ということはいろいろな役が回ってくるということです。年初放光寺さまで厄除けのお参りをしますが、除けたはずの役（厄）が次々と押し寄せて来ます。

昨年12月より曹洞宗長野県第二宗務所の庶務主事という役をお受けしました。曹洞宗は長野県の東北信を管轄する第一宗務所と、中南信を管轄する第二宗務所に分かれています。宗務所はその管轄する地区の宗派としての行政をあずかります。中央の行政機関が宗務庁、宗務所は地方行政の窓口ですから曹洞宗にとっては長野県庁のような位置付けになります。



役職は宗務所長が有明の正真院 東孝二様、副所長が松本の大松寺 倉科正彦様、教化主事（助役に当たる役職）が大町の霊松寺 伊東泰顕様、梅花主事（ご詠歌担当）が箕輪町の養泰寺 内藤真彦様、人権擁護主事が穂高の東光寺 若宮昭文様、書記（事務局）が穂高の正真院 東俊介副住職様です。全久院の東堂が10年ほど前、宗務所長の役に就いた時の庶務主事が現所長様でしたので、そのお礼奉公とも言えます。全力で勤めたいと思います。

任期の4年間、私は宗務所の会計を担当します。宗務所内には護持会、福祉会など別会計の会があり、また、布教師会・法式研究会・梅花師範会・寺族会などの独立した会があり、研修会や講習会など様々な催しがあります。また、他の宗務所との共催の事業や会合があります。会計も多岐にわたりますので、この職に就くことで経験できる様々なことを吸収しようと思います。また、この役職ならではの情報が入ってきますので、皆様にお伝えしたいと思います。

長男 俊浩が大本山総持寺の修行に入りました

あれ？と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、本来でしたら長男は大学3年なのですが、退学して本山修行に入っていました。剃髪して覚悟も新たに東堂と握手して横浜、鶴見の本山に向かいました。全久院は廃仏毀釈の後、当時の総持寺管主梅崖奕堂（せんがいえきどう）禪師により

あれ？と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、

復興されましたので、総持寺で修行をします。修行の様子はこの紙面でまた本人から紹介してもらおうと思います。私の修行経験からしても、現在では考えられないような厳しい毎日を送っていることと思います。

俊浩は退学したこともあり高校卒ということになり、全久院の跡継ぎに必要な資格を得るためには6年間の修行が必要になります。その下の資格を得るにも4年間の修行が必要です。そんな覚悟で3月8日本山の門をくぐりました。私が言葉をかけることができるのは下記の写真の建物「新到安下処（しんとうあんげしょ）」までです。新到とは新たに到着



した修行者のこと、安下処はその新到が修行の心構えを叩き込まれ、指導を受ける処



です。ここからは親との音信は禁止されます。いまだに連絡を取ることができません。

この安下処に入るために「長野県松本市第407番全久院住職倉科利行、徒弟倉科俊浩であります」と大声で怒鳴らなくてはなりません。声が小さいとやり直し。間違えるとやり直し。古参和尚の威圧感に俊浩も10回ほど言い直しました。同行した長女と次女のほうがその緊張

感に「お兄ちゃんかわいそう！」と涙目になってsじよまりました。1日2～3時間の睡眠と限られた食事、「そんな経験を乗り越えて自分を鍛えてもらいたい。がんばれ！」と私も思わず心の中で怒鳴っていました。

お盆参りのお知らせ

お盆のお参りの予定表です、ご覧ください。俊浩もお盆の

手伝いには特別許可を得て帰ることができます。市の南を中心に毎日60軒ほどお参りに伺いますのでよろしく願います。

8月	住職の回る範囲	俊浩
9日	新盆のお宅	
10日	安曇、明科、麻績など超遠方	
11日	並柳、寿、塩尻、広丘、村井、平田、新村、波田、荒井など市外南部と西部	笹部、征矢野、南原、月見町
12日	筑摩、神田、山辺、惣社、湯の原、横田、岡田、桐、沢村、蟻が崎、城山など市外北部	石芝、二子、神林、南松本

13日	源地、県、清水、女鳥羽、浅間など市内北東部	宮村、埋橋、井川城
14日	北深志、沢村、蟻ヶ崎、丸の内、六九、今町、宮淵、島内、白板、渚、巾上など市内北西部	本庄、庄内、南新町 井川城、鎌田、
15日	留守だったお宅、博労町、天神、飯田町、本町	東中条、博労町、天神
16日	留守だったお宅	

私は1日100軒前後、俊浩は50軒前後の檀家様のお参りをします。何かの都合でお宅を抜かしてしまうこともあります。抜かされたかな？変だな？とお気づきになりましたらお電話ください。お留守のお宅にはお参りに来た旨を書いたカードを置いてまいりますので電話にて都合を打ち合わせていただけたらと思います。よろしくお願いたします。

お盆前の作業と懇親会にどうぞ

本年も、お盆が始まるにあたり、お墓の掃除や、窓拭きをしていただき、その後懇親会を催したいと思います。昨年も15人の方に参加していただくことができました。写真は、汗だくになり枯れた花などを集める皆さんです。住職も堅苦しい着物を作業着に替え、一緒に作業をし、一緒に汗をかき、一緒に美味しい一杯を頂きます。



7月21日(土) 15時より掃除 17時より夕食を兼ねた懇親会。全久院の庭に集合 作業のできる服装でお越しください。厳粛な中での触れ合いでなく、汗をかきながらの作業や懇親ですので、堅苦しくないお寺の様子もわかっていただけるかと思えます。参加希望の方は食事の都合がありますので、電話にてお申し込みください。

境内散歩 -十一面観音様

前号に続き十一面観音様の紹介をいたします。観音様は紀元前後に人々の苦悩を救うということで大乘仏教運動とともに広まりました。片手に花、それをつまむようにもう片手という姿です。全久院の観音様は十一面観音。花とともに頭に十一面のお顔があります。

十一面観音様の成立はインドのインダス川上流



のギルギット出土の梵本に「エーカーダシャ・ムカ」、「11の顔を持つもの」との文書があり、また「法華経」の普門品に「あらゆる方向を向くもの」の語があり、これが起源と考えられています。あらゆる方向つまり十方を向く顔と自分の顔を入れて11面のお顔で、すべての苦悩を持つ人々を見つけ、救済の手を差し伸べる仏様として信仰を集めました。中国では北周(557~581)に十一面観音に関する経が訳され、信仰が広まりました。日本では8世紀初頭の白鳳時代、紀伊那智山から出土した金銅十一面観音像と、法隆寺金堂の壁画阿弥陀浄土図の十一面観音が最古のものとして残っていますので、このころ観音信仰が始まったと考えられます。平安時代戦乱による戦没者の慰霊法要を行い、六道に輪廻して苦しむ人を救済する六観音信仰として広まりました。聖観音は地獄道、千手観音は餓鬼道、馬頭観音は畜生道、十一面観音は阿修羅道、准胝観音は人道、如意輪観音は天道に輪廻し苦悩する人を救います。ですから全久院の十一面観音様は阿修羅のように突っ走り、周りが見えなくなり、自分のことばかりに苦悩する私たちを救ってくださる観音様ということになります。

十一面観音様の3面は怒りの相、3面は寂靜の相、3面は菩薩の表情で牙をむき出す相、1面は笑怒相、そして正面のお顔ということになります。悪い心を払いのけ、苦悩を受け入れ、安らぎを与え、微笑を取り戻す役を務めます。日本では特に難を除き、富を与え、異性とめぐり合わせ、身分高める現世利益の仏様として信仰を集めるようになりました。特にご利益を与えてくださる日として室町時代には毎月18日が観音の縁日として広まりました。また7月10日を、四万六千日、九万八千日、九万九千日といわれ、この日のお参りは1000日・46000日に当たるとされ、特にご利益がある日という信仰も広まりました。江戸享保年間(1716~1736)には、特に四万六千日の信仰が広まりました。4万6千は1升の米粒が46000、46000は一生の意味、信心の完成は46000日必要、などの考えが底にあったようです。

現在も観音札所巡りが盛んですが、平安時代末期に複数の観音霊場を巡礼する風習が生まれ、十世紀、花山法皇(986~1008)が西国三十三観音霊場巡礼を始めました。15世紀末ころには東国からも東海道を經由し、伊勢神社から、那智山、紀伊→京都→若狭→美濃の順路での巡礼が盛んになりました。源頼朝をはじめ一族の観音信仰が14世紀には庶民にも浸透し、15世紀には坂東三十三霊場が定められました。

これらの霊場は「札所」と呼ばれますが、かつては板に御詠歌や祈願文書き、その札を打付けたことがその起源といわれます。秩父三十四番が定められ15世紀末には、西国+坂東+秩父の百所巡礼が成立しました。江戸時代には信仰とリクレーションを兼ね、江戸・京都の洛陽・会津・最上・信濃・遠江・岩城・神戸福原・出雲などの霊場巡りが盛んになりました。現代のことを考えると、はたしてどっちが豊かなのか？私たちの生き方をじっくり見つめ直さなくてはならない時は今なんだと思います。

「いらの会」活動本格化 「いらの会」が発足して3年目を迎えます。NPO 法人格を取得しているため毎年定例総会を開催します。写真は総会の司会をしているところです。この会は「家族や地域の絆が希薄になり、ちょっと

した気遣いやお手伝いでもっと潤いのある過ごし易い社会になるのに・・・」という思いをもった方が集まってできた会です。買い物代行、薬を病院にとりに行く、家事の手伝い、庭掃除など何でも安い時給換算の料金でお引き受けします。全久院にとっては葬儀や法事の手伝いをしています。以前は隣組や親戚がやっていた会場作りやあとふきの手伝いを代行します。全久院での葬儀や法事には5時間ほどお願いしてもらえば、片付け、掃除までしてもらえますので、ご利用いただいた檀家の皆様にご好評いただいています。これを機会にご自宅でのお手伝いも頼まれたとの話しも聞かせていただくようになりました。ご先祖様のためにも、宗教心を養うためにも、家族が深い結束を培うためにも法事は寺や自宅で行うのが最善と考えます。地域や家庭の中で人と人の繋がりを希薄にしてしまったことが今様々な問題を起こしている一番の原因と考えます。「りらの会」はそれをもう一度取り戻そうというのが趣旨です。会は人手も求めていますので、



「オフィス りらの会」代表 鳥居とし子 電話0263-46-2175

へお問合せください。

全久院の催しもの

蚕霊供養祭が毎年6月に執り行われます。松本は明治から近年にいたるまで蚕糸業の力で発展してきたと言っても過言ではありません。それに携わった企業や個人が集まり、昭和15年秋右の写真の慰霊塔を建立しました。山門を入ってすぐ右、木々の中にそびえています。当初は鉄の棒の柵で取りかこまれてい



ましたが、終戦前軍に抛出し、現在はそれを固定した穴が残っているだけです。碑の裏には

繭形巍然として覆蔵せず、蚕児の群霊塔中に眠る、熱殺幾億国系輝く、地獄天堂海洋に帰る、(繭の形は高くそびえ隠れることがない、蚕の霊がこの塔の中に眠っている、糸を紡ぐために何億もの蚕が熱殺されたが日本を支えた糸は輝いた、熱殺の地獄を乗り越え日本や日本国民を育んだ蚕は今供養され元の命という海原へ帰った)と刻まれています。日本の発展の礎となった蚕への感謝と、慰霊の念が表現されています。(左の写真)



現在は蚕糸業に携わる方が減ってしまいましたが、明治以後日本が欧米の列強に肩を並べるに至った蚕霊への感謝の念を忘れてはならないと思います。

全久院の集い

ご詠歌 梅花全国大会は本年5月15～17日にさいたま市の「さいたまスーパーアリーナ」で開催されました。もともと広大なサッカー場にステージを設営し、15・16日の2日に分かれそれぞれ8000人を收容し、ご詠歌の大会を行いました。



私たちは追善供養御和讃と追善供養御詠歌をお唱えしました。近隣の幼稚園生による献灯献花や法要、禅師様からのお言葉、記念式典などのあと、いよいよ発表です。ステージの上に600人が上がり、心を一つにしてお唱えしました。右の写真でもわかりますように壮大なお唱えとなりました。参加者全員のお唱えが終わり、余興として谷村新司さんのコンサートがありました。私たちは2日目の参加でしたので、谷村さんも雰囲気になれたらしく、「昴」「サライ」など次々にアンコールでヒット曲を歌い上げました。私たちも大満足。その日は越後湯沢温泉で疲れを取り、大宴会。全久院班は「千の風になって」を合唱。思い出多い大会になりました。来年は福島県での大会です。皆さんも御詠歌のグループに入って一緒に行きませんか。

座禅会 座禅会では曹洞宗の座禅のテキストにあたる「従容録」を呼んでいます。6月は十七則「法眼毫厘（ほうげんごうり）」を勉強しました。中国の仏教界で一、二といわれる法眼禅師の下に、あちこちの有名な禅師様の下で長年修行した脩山主が修行に来ました。この二人の問答が解説されています。

法眼が脩山主に「毫厘も差あれば天地悠に（はるかに）隔たる。汝作麼生（そもさんか）会す」（少しでも差があれば天地はるかに差があるのと同じだ。お前はどうか）。脩山主は「毫厘も差あれば天地悠に隔たる」とまったく同じ答えを返した。すると法眼は「そんな答えでは仏教は滅んでしまう」と答えた。脩山主は長年の修行で自分は悟りを得ていると考えていたため、訳のわからぬ法眼の元を去ろうとしました。が、それでももう一度だけ仏法を聴いてやろうと「和尚また如何ん（いかん）」（和尚様もう一度お教えてください）と聴くと、法眼は「毫厘も差あれば天地悠に隔たる」と答えた。それを聴き即座に脩山主は悟りを得た、という話です。

禅問答の究極がここにあります。まったく同じ問いと答えが二人の間を歩きかけた

だけで悟りに達してしまう。まったく不思議な問答です。脩山主は修行が行き届いて、もう悟りの寸前まで来ていた。が自分はすごいんだ、自分は出来上がっている、自分こそは、という「我」に取り付かれていてそこから抜け出せないでいた。そのわずかな差が「毫厘の差」で、その差のおかげで「天地悠に隔た」っていたのです。「我」を捨てて再び法眼に聴く気になったことによりその「天地の差」を飛び越えたのです。

私たちの日常でも我・我執・執着の心を取り払えば、とつても狭い「毫厘の差」のところを飛び越えて、天地悠々と広がる世界に身をおくことができるのですが。それをわかっていてもどうにもならないのが人間なんでしょうか。飛び越える努力だけは続けてゆきたいと思います。

観音講 6月は観音講のレクレーションの月です。今回は湯の原、御母家の「金宇館」へ行って来ました。ゆったり温泉につかり、金宇館の心温まる料理をいただき、すばらしい半日を過ごしてきました。この旅館はお花祭りの托鉢で毎年お寄りするので親近感はありましたが、お湯につかり、料理をいただくことがなかったので、気になる旅館でした。浄林寺さまの檀家さんで、御母家でも一番奥のほうにあり、昔のままの木造で、温泉情緒満点の雰囲気。コンクリートの近代的なホテルもいいのですが、古いものを大切にしているこんな旅館もすばらしい！観音講の皆さんもしっかり英気を養い、岐路に着きました。金宇館の皆様ありがとうございました。



護寺会より 毎年新年会は決まった顔で、決まった人数でという会が続きました。今年の新年会は何とかしなくてはということで、全久院の持てるすべてを動員してみました。1月20日(土) 3時半から茶道部により抹茶の接待。毎週火・水・金・土の4日間稽古していますので、その成果を発揮してもらいました。10人ほどのお弟子さんにより、あまり堅苦しくならない程度に茶道の作法に従ってお茶を飲んでいただきました。4時から本尊様の前で、イスに腰掛けての座禅。ここでは座禅会の方に背筋を伸ばす指導をしてもらいながら5分間心を沈めて、静寂の空間を皆さんで創造してもらいました。一瞬にして静寂の世界を作ってしまった参加者の皆さんには私もびっくりしました。総会後の懇親会では次ページの写真ようにご詠歌の皆さんにより「三宝御和讃」、そして南こうせつさんが作った新しい御詠歌「まごころに



生きる」をお唱えいただきました。「まごころに生きる」は誰でも口ずさめる曲なので、大合唱になりました。また観音講の皆さんにはいつも歌っていた「千の風になって」と何曲か歌ってもらいましたが、これもまた大合唱。全員で70人ほどの参加者の皆さんですばらしい時間を作っていただきました。おかげさまでおいしい般若湯を頂戴することができました。茶道も御詠歌も座禅会も楽しいというよりは稽古の要素が強いので、にぎやかに会を盛り上げることはできないのですが、志を同じくする方々が集まるとわくわくする雰囲気作れる、ということを発見しました。来年もまた志向を凝らして、多くの檀家の皆様に参加いただけるものになりたいと思います。



仏教ミニ知識

盆飾りについては全久院報18年7月号で説明しました。具体的な飾り方はそれを参照していただければと思います。今回の写真ですが、中町の増田家の仏壇です。松本市の商家特有の仏壇です。仏壇全体が時代劇に出てくるような「おカゴ」になっています。松本は火事が多く、それに備え土蔵造りが広まりました。このお仏壇には屋根が付いており、その下に角棒を差し込む穴があいています。火事の時棒を差し込んで運び出すように作られています。話には聞いていましたが増田さんはこの貴重な仏壇を今でも大切にし、子孫に伝えてゆこうとしています。さて今回はお盆行事の発祥をお話したいと思います。



お盆の発祥 私たちのお盆の行事は2つの行事が重なり形作られたと考えられます。

孟蘭盆 「お盆」の起源は「孟蘭盆経」にあるとされています。このお経には次のような教えが説かれています。お釈迦様の弟子で神通第一といわれた目連尊者が超自然の透視力で母を見たところ、餓鬼道に堕ち苦しんでいる。母を救う道をお釈迦様にたずねると「雨安吾の明けた7月15日に仏と僧に供養しなさい。七世の父母の苦しみを救うことができる」との教えを受け、供養したのが孟蘭盆会（うらぼんえ）といわれます。古いインドではもともと「ウランバナ」という言葉があり、「倒懸（逆さ吊り）の苦しみを救う」ことを意味します。イラン語では「靈魂」を意味するのことから、インドからペルシャにかけての広い地域で長い時間をかけ形成された行事と考えられます。

この盂蘭盆会は中国では538年梁の武帝が同泰寺で始めたと記録されています。そして唐代に全土に広まったそうです。日本では606年推古天皇が斎を設けたとの記録があり、仏教伝来の当初よりこの行事は日本に伝わり、広がりました。日本はもともと祖霊信仰が宗教の根幹になっていましたので、それと結びつき民間の習俗になったのも自然の成り行きだったのです。先祖の霊を迎えて祀る、心あたたまるハレの機会としての夏祭りにインド発祥の盂蘭盆会が合流したのです。

施餓鬼会 この行事は「救拔焰口餓鬼陀羅尼經（ぐばつえんくがきだらに）」の教えから発祥しています。顔が醜く、やせて、口の中で火が燃えている餓鬼が、釈迦の弟子阿難（多聞第一）に「お前はあと3日で餓鬼道に堕ちる」と予言。釈迦は陀羅尼を唱え、飲食を施せば一切の餓鬼が救われると阿南尊者に説きました。そこで阿南尊者は餓鬼道に堕ちて飢餓に苦しむ餓鬼に食物を施して供養する法会を催しました。その法要が中国を經由し日本に伝わってきました。日本ではそれが三界の万霊への供養という形で広まったのです。この二つの法要が合流し、日本独自の祭りの要素が加わり「お盆」の法要になったのです。

一定の期間（7月13日～16日）身を慎み、先祖への供養をし、家や村の幸運を祈るために盆棚を作ります。そこに盆花（桔梗・女郎花・萩など秋の七草など）を供え、先祖の霊を迎える道標や、先祖の霊が一時的に安らうための依代としました。そしてその棚の前で手を合わせ、心を安んじ、豊作・幸福・長寿・安穩を祈ったのです。そして16日ご先祖様やもろもろの精霊を送ったのです。

お盆という行事の中にはこのように、世界中の様々な要素が織り込まれ、それを日本人独特の宗教観で豊かに再構築して、長い年月をかけて日本人の心の中に根を張ってきたのです。とって豊かな宗教観をもった日本の行事と思いませんか。忙しさに心をなくしてしまいそうな現代人がお盆の期間中里帰りするのは、この豊かな歴史、文化、伝統、生活の中でじっくり醸成された行事に包まれて、知らずに傷ついた体や心を癒しているのではないのでしょうか。日本の伝統的なものに目を向けることが重要！という時代になってきたと思います。

茶道コーナー

城茶会 今年も忙しい茶会の毎日が続いています。松本市の市政100周年行事の一環として、6月毎週土日の10時から15時まで、お城の庭で呈茶をするよう要請されました。表千家の先生方をお願いして、持ち回りで担当することになりました。一服500円でお城のシル



エットが焼きこまれたお菓子と抹茶を提供しました。ここ数年お城での観光客への抹茶のサービスが定例化してきています。多くの手が必要になっているのですが、茶道の稽古をする方が減り、対応が難しくなっています。近年茶道ばかりでなく、日本の伝統的な文化である華道や舞踊、琴などの音楽の稽古人数が減っています。稽古は厳しさや忍耐が要求され、長い年月稽古を続けて始めてその楽しさがわかり始め、成果が現れてきます。これらのことは現代の人が一番嫌がることになってしまいました。しかし、厳しさや忍耐や長い継続は今まで日本を支えてきた一番の美德ではなかったでしょうか。もう一度現代人が見つめ直さなくてはならないことだと思えます。

全国大会 私は初めて表千家の全国大会に参加しました。今までは東堂が参加していましたが、今年からバトンタッチとなりました。今回は岐阜県高山市での開催でした。高山というと古い町並みを思い浮かべますが、実は天領として発展し、茶人で有名な金森宗和を輩出した金森家が統治した文化の薫り高い町でした。高山の保存町並み地区の真ん中に二木家があり、高山一の造り酒屋を営んでいます。この家は表千家家元10代吸江齋と姻戚関係があるなど、茶道文化とも関係の深い町でした。左はその二木家の茶席です。高山はこのように文化や伝統や歴史を大切にしていますが、松本はどうでしょうか？全久院の檀那、松本城主戸田家が廃仏毀釈を行い、古くて貴重な寺院を多く壊してしまったことにも影響されているのか、お城以外歴史や文化を感じられるものが残っていないのが大変残念です。茶会を開きたくても松本らしい、文化や茶道具などが残っていません。お城の茶会を開催してもお城にまつわる茶道具が一つでもあったらな！と感じています。歴史や文化を大切にする高山での茶会は多くの示唆を与えてくれました。



大黒コーナー

檀家の皆様も大黒には声楽家の側面もあることを誌面で紹介してきましたが、本年5月二つのオペラに出演するなど、オペラ歌手ならぬオテラ歌手の様相を呈してきました。長野市を中心にした地元の音楽家で組織する「つちの会」が5月6日長野市文化会館中ホー



ルでオペラ「フィガロの結婚」を上演しました。1年ほど前オーディションに応募して、みごと伯爵夫人の役を獲得し、1年間何回も長野に通い、練習を繰り返しての公演でした。



また松本でも、お花祭り協賛の公演として、「フィガロの結婚」を上演しました。松本では大きな音楽祭があり中央から名の通った音楽家が呼ばれ、地域の音楽家がソロのパートを担当する機会はほとんどありません。そこで地域の音楽家で「オペラを楽しむ会」を立ち上げ、上演にこぎつけました。5月2

7日松本市芸術館小ホールは立ち見が出るほどの超満員でした。本当はシリアスな内容を監督がコミカルな日本語版の脚本に仕立ててくれたために、分かりやすく、会場は笑いに包まれました。また音楽性の高いソリストの歌唱力に対して「ブラボー」の声がとびました。当日配布のパンフやチラシには全久院関係の皆さんのご協力をいただき名を押せていただきました。ありがとうございました。これからも企画をし、練習を重ね、2年に1度の公演を目指したいと思っています。オペラはお金がかかるといことで敬遠されがちですが、地域の皆さんの協力を得ながら、手作りで仕上げたいと思います。本当の意味で「地域に根ざし、地域から発信する文化」に育ててゆきたいと思います。ぜひご協力くださいますようお願いいたします。

全久院を会場にしての葬儀や法要を考えてください

「りらの会」のコーナーでも述べま

したが、宗教としての法要を行うにはいろいろな要素があります。もっとも大切なことは、家族、親戚や関係者が心一つにして亡き人やご先祖様の供養をし、私たち子孫が元気で協力し合い家を守り、興隆させようとしている姿をご先祖様に報告することです。そんな意味を持つ法要を寺で執り行うことでさらに意義が深まります。「お寺の雰囲気の中で法要をしたいけど、人手がないし、正座ができないし」など多くのご指摘をいただき改善してまいりましたので、檀家の皆様にお使いいただける環境は整ってきました。この会報の中でも述べてきたように、もとの処に戻さないがために多くの社会問題が起きています。自分ができることから一つずつ整えてゆくことが、乱れきった社会を復興させる一歩に繋がると思います。仏事はご先祖様へ供養という意味ではありません。仏事を催す親の姿を子供たちが見えています。目に見えないもの、効果や利潤がすぐ結果に現れないもの、営利主義からすると合理的でないものでも、長い間日本人が培ってきた人間形成に必要なものがぎっしり詰まっています。それらを大切に作る親の姿が子孫に伝わります。それが乱れた社会の復古への第一歩ではないでしょうか。ぜひお寺で葬儀や法事をするを考えてください。

掲示板

(皆様のご参加お待ちしております)

～お盆前の作業と懇親会～

7月21日(土) 15時より作業(お墓の掃除・窓拭き)、17時より懇親会、作業のできる服装でお越しください。参加希望の方はお寺へその旨電話ください。ぜひご参加くださいますようお願いいたします。

～施食会～

8月5日(土) 12時より寺自家製によるお弁当、12時半より観音講の皆さんと一緒に懐かしい唱歌の合唱、13時よりお話、14時より法要(ご詠歌の会の皆様による奉詠、15時よりお塔婆を配ります。今年も皆さんにお参りいただけるような内容を考えています。ぜひご参加ください。

～座禅会～

9月2日(土) お粥と精進料理、9月22日(土)、10月20日(土)、11月17日(土)、12月22日(土) お粥と精進料理、それぞれ4時から6時まで行います。

～ご詠歌会～

8月23日(木)、9月13日(木)、10月18日(木)、11月15日(木)、12月13日(木)、10時から11時30分の練習になります。

～観音講～

毎月17日、10時から12時30分まで行います。観音様にお経をお唱えし、住職からの話、ご詠歌、大黒のピアノにあわせ唱歌を歌い、精進料理をという日程です。毎回500円の供養料をお持ちよりください。6月と10月は近郊への小旅行です。

(寺の都合で日程に変更がありますのでご了承ください)

お知らせ

- ☆ **開山堂の位牌調査をしています** 開山堂の位牌の位置を表示したいと思えます。お名前を確認したいと思えますので、開山堂内に掲示した表に、**お名前・旧町名・電話番号** のご記入をお願いします。
- ☆ **全久院内墓地の改装に当たり** 最近のお墓の工事にはクレーンなどの機会が欠かせませんが、道が狭くて中に入れず、区画の調整が急務となっています。墓地の改装に際して寺と相談いただきますようお願いいたします。